

12～3月ゼミ室

活動内容

・手織り作業



洋服を作るとなると8メートル以上の長さが必要になってくる。はじめのデザイン決めや糸決めに時間がかかってしまったこともあり、冬場は講座の時間も織物の時間に当てて、追いつけるような形で作業を続けた。

その中でも徐々に参加者同士が打ち解け始め、織物に関することに限らず、様々な話をしているようすが伺えた。若い世代の人たちの間では、織物ゼミ室の時間外にも会うようなこともあるほど、親交が深くなっていた。

イベントの様子

みなさんもともと関心のある人だけに、講座では熱心に聞いているようすが伺えた。少人数のアットホームな雰囲気なので、わからないところがあればその場で聞くことができ、参加者の理解度に合わせて講師の方もお話ししてくださっていた。最後の質問の時間にもほとんどの方が質問を出してくださったり、感想を述べてくださったりした。また参加者同士で意見を述べ合ったり、知っていることを伝えあったりする場面も見られた。講師の方からも、このように素直な意見が聞ける場が新鮮でよかったというご意見をいただいた。まさにゼミのようだったと思う。

織物作りでは、はじめの段階で悩む人が多く、思っていたよりも時間がかかってしまった。これから1年間織るものなので妥協したくない、失敗したくないという思いから、慎重に進めたいという思いが伺えた。そのため悩みながらではあるが、どんなものを作るか楽しんでいच्छるようにも見えた。はじめの部分が決まってしまうと単調な作業が続くため、参加者同士の雑談が多くなった。親交を深め、イベント外の時間でも会うほどの中になった方もいるようだ。また1年間の活動を通して参加された方全員が、手織りをする程度できるようになった。

イベントの効果

1 サポーター作りの達成

1年間という長い期間をかけたことで、ゆっくりと郡内織物についての理解を深めてもらえたようだ。参加してくださった方からは、また来年もやりたいという声や、他の企業も見てみたいといった声も上がっており、「興味がある」というところから一歩踏み出せたのではないかと思う。

2 新たなコミュニティの創出

これまで「学生と市民との交流」というと、学生がボランティアという形で参加することが多く、「市民」「学生」という枠組みを超えられないような印象があった。しかし、この企画を通して、「郡内織物を学ぶ」という共通の目的があること

で、同等の立場で一緒にものを考える新しい交流の形が生まれたように思う。また、学生と市民だけでなく、市民同士でも親交を深めるきっかけとなっていたようだ。

3 地域の文化を継承する一端に

活動を通して、衰退しているといえど興味を持つ人はいて、文化としても誇れるものであると改めて感じた。しかし現在、都留市の谷村織物協同組合も形として残っているのみで、普及活動などは大々的には行っていない。織物文化を継承するにあたってWEAVEの活動は地域の文化を継承するという点で対応しきれない部分を補完する役目を担えるのではないかと考えている。

今後の課題点

年配の参加者の方には活動の意図が伝わりにくかった。手芸サークルでも、郷土研究会でもなく、ゼミのように一緒に学んでいくという形はわかりにくく、「先生」のような立場の人がいないところに不安を感じさせてしまった。

今後はイベントを行う団体という認識から、郡内織物について学びあえる環境という認識をしてもらえるよう伝え方を工夫したい。活動は長期的に継続することで、郡内織物のサポーターが増えるはずなので今後も継続する予定。